



離譜南坡新話

合本  
乾坤



南の諸序

くはくは佛中々居士や福すれものあり予や旧流  
お許す何一先難波子あはるをくく一は野城を  
くはく西海の好士やた才を志すくく一は東武  
くく下川も其門にあやふ又きつく尾城は寓  
くくく蓮二く一流く接すくくく山の事ある予  
ハ仙觀を和くく山もひおのに春林を意近は  
すむ糸馬を躍くくくく水海子北海子希固習  
くはくはくはくを愛くく止はくくおおくくを  
まくれや文も能浦や名司勉をくくく鳴く時

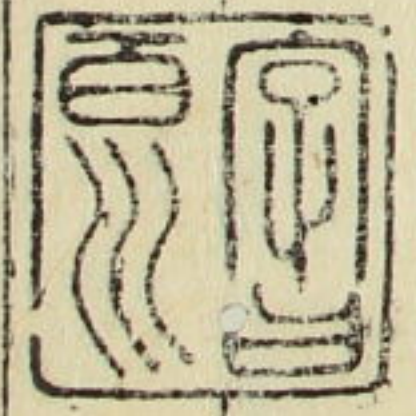


令嬢を慕ふ一多南海子中く南海子梅路あり  
かれをちかしくなる夢寐す字に於て連句を  
ちかやさうや非かす杜若あり大和子古山あり  
いつれも櫻々ちかおるゆすくよあ島あり  
ちうそ梅井乃里く位果人をちかき一金榜山の  
るお子夢く一啼あつ子ありく一て筆をな本ま  
えく一ふひぬきつれ東海子神表時の重然山の  
とや一筆をむすひいす涼雲と戯海くく  
は海くお周と号せぬ比たう南水の日記を懐す  
予かた梅木ののせもく云今やうれ子過すも

あつて予をく一多席の如くよはくせんやん  
教福せんおひくをくお何をく辞一あふよをい  
ま一田可く書殺のぼくくおてお神のまを  
つくおの

干時延享四総丁卯初秋

洛陽 法橋百川題



凡例

此二篇ハ聊々村中の事記すさうや東弦の  
 志の心や人の事なまゝ〜白鳥居きり〜  
 かまらふなを付〜とあり〜笑つて拵笑  
 こゝれやまもあ〜んや〜  
 歌句は撰男〜つ〜物すれ〜あり〜決あ〜ハ  
 ま林の判を看〜て通志の度く福や〜  
 平句ハま林物語希同及同志ヤも柄を加〜  
 例法す又古人の句も〜まあり  
 句は此目録〜つ〜まハ羊頭を画〜物肉

を〜  
 句〜  
 句〜

句〜  
 句〜

南土新話目録

歌句の由来 　　ま林の説 　　希同、辯  
 句は新編 　　〜句を定法  
 句は平居 　　ま林、猪垣の句法  
 ま林凍鼓の句 　　ま林、猪垣の句法  
 志くその句解 　　ま林、猪垣の句法

おすぬうは

自然の句

祝お

隨宜なる句

流り乃家福

おん學道

うおき者ゆり

うけ訛の福

言渡の扱

まを林麻流うの二判

まを林自適

衆の变化

京代著

凡衆の变化代をわし一に既一泰山も残のなく推考信ひせん  
 くもお措一をいお子傳んて申お時をくあおい極の枝  
 を成くお美子囀りの秋を化里河おいおおをわのあ  
 一す一お措とんちてん彼をやの免ををきいあ  
 一示はは泰山のすういをかおれと眼し一ていおお  
 多くハ儲をのういおお一とて一平句多難のい  
 一を云持てもうかいをれかお句い多其の扱もひや  
 一感懐もおおもむきお同ふれば天地をいこを難くす  
 一うもゆりすく思もおわらおむさしいおけく一



漢書のあつちのあつち

あつちのあつちをすかすかあつちのあつちのあつち

かへこれのあつちをすかすかあつちのあつちのあつち

漢書のあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

う句一

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつち七文字乃御名のあつちのあつちのあつち

あつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつち

加賀の希用い字を拾へ一字の變化は句を記せらるゝ  
 妻林乃侍子通ひしれしあしやききとてはむき  
 かのやけはちむい何雅の通志はあはれむしりて回  
 他同意の句はとてよき句は兩化のも柄しりてあ  
 手ハ他化の未熟なむむ又二一字乃すくこのまは好悪  
 いたのむえん備れも一氣の舞に舞て回敷くはし  
 亦備を思ふすれい他法いり何ろ及せむ只るな  
 ねとをぬぬぬ微きありさしりて初學のあひひ  
 あやむいり古人の句を従へすは志しりて字子  
 じりて他法をやし馬鞍橋をいり何翁の下領をい

和歌のやあひい字の採り

とちうけすしきあおむなうかたちようぢいさき  
 あひの花とてちちや死活乃扱すくをうけり  
 いらいすれまむらりきまむらり  
 とふやの道具をうけあはきや榎木とてあてか  
 や伊勢の人乃お境をつてあけ下はあ只乃具あ  
 ちりりて嫁入の道具をあはむらり何ろぢり  
 ときつめはれはれ子舞の菓子雷とてぢりちき境は  
 上もハ蜘蛛の巣ハ木槿を案ハけり只る子葉ハ切  
 尋ねハなな祭新古とて道具あは梅の香ハき



子亦も志づきしに止むるはたまたまのちかきるはるに  
も後うにあれしきるもなれはひつぬあ一字一化のま化  
を悟すな今れ何れを志れ人としふく

ま林の況

ま林たたりた右子志のけまは後うせむとあまのま  
白はを志れまきりす只あまのまを十五すしに後うく  
とあま申れはるにやめは益をへぬるに平うさ  
すうをか申れは情語と平話のまらまを志れぬは  
くかくと動りぬを何法一節にまをさすぬぬぬ一は  
まあま一もすしにぬくはま一まはも一ぬしぬ

あまくやまよくまらぬるすし一あれうまぬ  
何やまものハ何れ乃罪人なりぬぬ一ぬぬ

希用、辯

流落にあますぬるハ様ハ曾りり上まわく一越向ハまぬ  
あまら又まきまらぬる誰もおもひあぬぬものもま  
う化ハ辯者のものしふも一何れハ帛を製くらたぬ全  
神ハ口せぬのまらぬまらぬ

う法の備

うハ只迷うたぬれまよおをえぬしすうては登きぬは時を  
誰もかあまらぬものなりと実境のよく月あぬ









むろく〜いき〜に意す人の〜赤ひや〜の義理  
やゆり有る及おとびま〜の道理もあし恥し  
ふ〜あ〜る〜進退計もあ〜た〜と〜え一已  
ん乃〜う〜なればか一通きねむ〜一極もあ  
ま〜れ〜あ〜し〜の〜又〜煮〜く〜天地を胸中子容  
ゆる〜意の中子容〜と〜云〜六月暑〜と〜つ〜り〜せ〜ハ〜天下能  
き暑を〜一ぬ〜され〜人情の通用を〜り〜山も高く海  
ゆ〜と〜眼おの〜気〜を〜け〜す〜ま〜ま〜り〜す

句評の箴并 麦林あ〜と〜れ〜句評

〜の〜を〜お〜も〜と〜う〜を〜評〜す〜う〜只〜句〜中〜の〜骨〜材

あ〜と〜め〜の〜は〜屏息〜と〜辟〜つ〜ま〜り〜な〜り〜春林〜  
句を定め〜り〜乃〜墨〜舟〜間を好〜る〜秋の〜れ〜猪垣の〜盡〜し〜ぬ  
け〜つ〜り〜と〜案〜〜と〜墨〜舟〜耳を窺〜子〜舟〜云〜つ〜り〜ぬ〜ハ〜け  
句上〜り〜メ〜字〜あ〜〜と〜〜と〜ぬ〜ん〜ハ〜り〜の〜一〜字〜が〜子〜ゆ〜〜ぬ  
今〜一〜ユ〜ま〜た〜の〜〜と〜ヤ〜と〜も〜黎〜林〜退〜じ〜る〜百〜疎〜〜又〜墨〜舟〜  
意をき〜き〜上〜の〜五〜メ〜字〜な〜く〜下〜乃〜一〜字〜ぬ〜〜那〜句〜い〜ん〜の  
や〜お〜と〜云〜舟〜曰〜け〜句〜を〜ゆ〜〜と〜ゆ〜〜り〜秋の〜墨〜舟〜メ〜字〜は  
決〜ぬ〜け〜〜り〜の〜も〜も〜子〜容〜評〜〜き〜と〜ハ〜け〜庭の〜林〜は  
棠乃四葉を圓子ひ〜〜と〜ま〜を〜な〜も〜や〜け〜葉の〜木瓜〜評〜す

似き人そち我のむほひも一て申さるる事よ  
云履きなり猪りまの句をまじあしく廻し何れか  
しめしめかよ一字乃ちかくしきも代ハ一句れ治定を  
おしんじ  
かやあまさめしむらう

凍鼓の句

かんこころふもあはれしむらふてりやあふもすはる人す  
かへしむらふらう一早舟の交合ハいも鏡の四はさしき  
なを希用ノ又通あり一財用け句をよらちふる今年の  
すかきなる春林の又通アキ夫の交合けくハあふ城  
うなやかすはじ

遠志の語乃句論

あふ人のいつくは遠しやあきまは遠乃ちく日る大の句  
尚遠しやあきまは遠乃ちく日る大の句  
ありてす申さしと句意いさう異なれ一さるる遠まは  
遠をすらす一ハは遠しやあきまは遠乃ちく日る大の句  
よくそく申され日る遠しやあきまは遠乃ちく日る大の句  
みハ遠しやあきまは遠乃ちく日る大の句  
きくしの句解  
俣ハ俣あきまのあや初一くはけりささけいもあきま  
向きしものあきまは遠乃ちく日る大の句

香林集

卷之四

とてしむ松系乃おこしつとてしむ松系探ふ松空下  
東の東附つる子なきをあしむや油な拱きゆるゆりかへりや  
こちえまをちしむるものしむるものあり法人の耳をすくぬる  
かなしつとてしむるものありししむるものありししむるものあり  
加の柳戸うさぬしおさむ

香林集解嘲

香林集のまゝの杜若のたもあや国ちなり今すくとくを  
撰しし無傷くおほしぬししつてしぬす吟もぬく又八回し  
くもあししきふしむしむる名をくすんまれり似り  
とてしぬしししぬの誦しつとてしぬまれり似り

なり流せん子若しつとてしぬまれり似り

ゆき香林集うねむるしむる麻のな甲しむる松句  
くつしむる松うさむるまのしむる杜若の未熟のしむる  
は作りや又も境の内海何のうしむるく何のうしむる  
おのしむるなりしむるゆりかへりや油な拱きゆるゆりかへりや  
あらししむるのえりしむる強しぬしむるたおしむる松空下  
よつしむる松うさむるまのしむる杜若の未熟のしむる  
一代の詩文集ゆりかへりや油な拱きゆるゆりかへりや  
ゆりかへりや油な拱きゆるゆりかへりや油な拱きゆるゆりかへりや  
和分の家代お好なりしむるゆりかへりや油な拱きゆるゆりかへりや

香林集



体十ノ号一きくぬとあゝ川ノ心定ハカ  
撰集よきう一なる一を何りのすまふあ一  
るねすもと大家乃一保よああつていも  
ま林白選なるも一う著う未執とヤウ  
も境まねぬ明郎の凡子ま林白選つて  
いゆつて又おのち自もすうたうす子産頃の  
定のうそとやんう一はるや用抄

月日

大和歌用

おまめ句法

むすふとハ孫讀して一句子孫なるもハお前の櫻子

おめく例乃うきく句やハきくをん

おゆへーお抄のつてぬさう一お那 有竹

そ十八町雲子里あり梅の志と意を何きりま林も柳  
きぬ句はく梅子おのすうもあえお抄子評乃木林  
向を立ちくお俵をとりなりきぬ之家をもと一隅をまれば

自然の句

〜筆をきき井田一もははきくは 晩九

予のめれ七尾は抄一つけ句の化志ま志ハく梅一  
同よりうる束はるしと向子化者ハきいひ抄  
あきさう一うおのほま林の秋歌あつくり又諸家乃

後篇をすしと一休又しハ情もたなきしなりとあり一休田  
一兼其の名不なると又うしあり一きくふくし乃と一  
やま子時ををもれ本のうに兼其の強し初るは志しは中四  
乃後ついで子志ら其の同宗をあせぬを因に名うれば切子  
おつとる中後の及し其のふあ一やとの時的なきもは付き  
親れとてふしうけをえありしは悲しくも心をか回中お物な  
存在と自然と号してしるすめく

観相

蜘蛛の洞にけくおし入むくちうら

希因

百心や夢りや筋乃ありう

ちよ

前めあはうはあのもぬく一権本一を因く中子秋乃  
日のいしきややく情欲の洞をせやしてさち因ち迅速  
の幽冥に入あるゆあやま林と此句を歎やうちよる句ハ心  
もふけえと界一のるを化け

隨宜の句法

隨宜ハ假しきやきぬる名もく句ハきく境と喜據をきりて  
宜し隨ふるもあの一安し不自らもくはし抑の眼  
を具すはやハ心は此ハや因し其不し入ぬハ心境乃通  
用を片もするもくたなり又うくめは問人自思の化語  
とせんの志りて人のきん子笑をくくもは吾師の

ち一なりと目鼻もすまむをいひせす号をのれ擔  
 杖 漢と新く杖賣れ細きまきふ凡う法に万代に此ハ  
 弱きも強し細くなれぬとさひ一盡しかしたむけは乃  
 あはらむをきふなをいひくは涙ありあつさくちのく  
 まむ杯の酒真まも之味疎をありて東陣より愛を飛せ  
 女自ら乃淋流るゝ二階の曲をあらわしあはれあり  
 甲斐音取乃妓奴も抱くゝとふれあありと女前赤乃  
 たりしみも志つめ構を多財乃宜も叶し甲てや昂真  
 の技投まほ一口は仇法とあはれく

源一の家論

家來る問答は海之教合なり子をのを見ればかく保り  
 一もして申すはハハハ海陽瑞のまじりて孫の川法  
 音腹のうきまもまきむとや言えう言をありとあはれ  
 かつらけし昨の言をすまき予曰す一めひくは法をき討論は  
 和らぬ人なりあつさくたきむのゝは凡虎を階しんぬ  
 との持因あり人を教えよの警策あり言えよいりるも  
 起きあつともあはれをさうて編き魚のいけきしと戯り  
 赤きをいり言えとるきぬるや持論のよしとやけり  
 能法と云ふのめは晋人乃清談なりしりくす用を討論を  
 云ふるね可き益の字益なりあつさくものなれとてけり口論

源一

のてきさけてあるを乃く説てを教へあるは棟樑  
交を對つそなきと云ずや道はまはし大略の  
豈能清の小めらをや段文又小家乃論なる想山を  
乃知<sup>+</sup>もや凡益あるもの多理非をせす益は道化  
と女子適すは成り永能清ハ上瑞瑤作文ハヤ音  
鳴鳴翻<sup>+</sup>噪海<sup>+</sup>潮<sup>+</sup>音<sup>+</sup>をそまへいのあまひありて大地と  
女子不益ちハハふ益ハお限りありて西あり東ハ云  
應<sup>+</sup>又俳諧のり糸を鑑大ゆ<sup>+</sup>もをあつれ  
勢<sup>+</sup>結<sup>+</sup>を<sup>+</sup>杞<sup>+</sup>國<sup>+</sup>の人乃痛くおもは能清とハいふき  
か子のあり<sup>+</sup>ま<sup>+</sup>れ<sup>+</sup>も<sup>+</sup>東<sup>+</sup>よ<sup>+</sup>く<sup>+</sup>赤<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>中<sup>+</sup>物<sup>+</sup>を<sup>+</sup>結<sup>+</sup>もの<sup>+</sup>

きんを依り<sup>+</sup>は<sup>+</sup>り<sup>+</sup>や<sup>+</sup>り<sup>+</sup>て<sup>+</sup>お<sup>+</sup>り<sup>+</sup>依<sup>+</sup>り<sup>+</sup>子<sup>+</sup>論<sup>+</sup>あり  
す<sup>+</sup>に<sup>+</sup>惟<sup>+</sup>然<sup>+</sup>坊<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>る<sup>+</sup>て<sup>+</sup>依<sup>+</sup>の<sup>+</sup>句<sup>+</sup>を<sup>+</sup>作<sup>+</sup>つ<sup>+</sup>て<sup>+</sup>評<sup>+</sup>き<sup>+</sup>ま<sup>+</sup>に<sup>+</sup>い<sup>+</sup>ふ<sup>+</sup>  
あり<sup>+</sup>き<sup>+</sup>梅<sup>+</sup>路<sup>+</sup>を<sup>+</sup>諸<sup>+</sup>家<sup>+</sup>乃<sup>+</sup>句<sup>+</sup>を<sup>+</sup>音<sup>+</sup>以<sup>+</sup>り<sup>+</sup>て<sup>+</sup>都<sup>+</sup>鄙<sup>+</sup>乃<sup>+</sup>街<sup>+</sup>り<sup>+</sup>  
〜<sup>+</sup>り<sup>+</sup>を<sup>+</sup>そ<sup>+</sup>な<sup>+</sup>る<sup>+</sup>の<sup>+</sup>く<sup>+</sup>き<sup>+</sup>名<sup>+</sup>を<sup>+</sup>や<sup>+</sup>能<sup>+</sup>清<sup>+</sup>を<sup>+</sup>あ<sup>+</sup>ら<sup>+</sup>わ<sup>+</sup>く<sup>+</sup>お<sup>+</sup>お<sup>+</sup>く  
ハ<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>神<sup>+</sup>孫<sup>+</sup>を<sup>+</sup>上<sup>+</sup>の<sup>+</sup>り<sup>+</sup>あり<sup>+</sup>も<sup>+</sup>終<sup>+</sup>は<sup>+</sup>の<sup>+</sup>淨<sup>+</sup>瑠<sup>+</sup>璃<sup>+</sup>子<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>他  
る<sup>+</sup>す<sup>+</sup>や<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>く<sup>+</sup>其<sup>+</sup>益<sup>+</sup>の<sup>+</sup>あり<sup>+</sup>ら<sup>+</sup>ひ<sup>+</sup>に<sup>+</sup>三<sup>+</sup>十<sup>+</sup>字<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>評<sup>+</sup>を<sup>+</sup>付<sup>+</sup>く  
子<sup>+</sup>和<sup>+</sup>音<sup>+</sup>不<sup>+</sup>然<sup>+</sup>と<sup>+</sup>り<sup>+</sup>め<sup>+</sup>し<sup>+</sup>や<sup>+</sup>す<sup>+</sup>能<sup>+</sup>清<sup>+</sup>を<sup>+</sup>し<sup>+</sup>て<sup>+</sup>大<sup>+</sup>道<sup>+</sup>と<sup>+</sup>説<sup>+</sup>く  
家<sup>+</sup>あり<sup>+</sup>何<sup>+</sup>と<sup>+</sup>り<sup>+</sup>家<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>言<sup>+</sup>れ<sup>+</sup>は<sup>+</sup>り<sup>+</sup>一<sup>+</sup>ヤ  
お<sup>+</sup>ん<sup>+</sup>學<sup>+</sup>子<sup>+</sup>道<sup>+</sup>  
は<sup>+</sup>一<sup>+</sup>め<sup>+</sup>く<sup>+</sup>教<sup>+</sup>を<sup>+</sup>學<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>ま<sup>+</sup>の<sup>+</sup>り<sup>+</sup>す<sup>+</sup>ハ<sup>+</sup>ま<sup>+</sup>の<sup>+</sup>句<sup>+</sup>を<sup>+</sup>評<sup>+</sup>

善也

善也

あつたよつとつた味は活物な雪をまらふは志つて  
すしと魚を魚を年々せせはハ何なるもさうやうやくんと  
家におもひあつたさな梨はハ明物をたぬは  
志うはもーま林乃口骨をまくと要す原もあま林  
のうはま物東あつたもさうもあまもは法をさ  
す先浦子略年さうせと家子古頭を蔵さ人子年をめ  
て希用い梅さ一対りて京より此又通子しつたの  
人をみえつたおもひまーりなるとさ

不考といはれなは梅さむ先の花 希用

開つたあまは志つた百疎さばあうさ一さもある

ふれとあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた  
さしあ一ははは本の梅乃又文字動りさハハ高あまは  
乃すつ梨さあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた  
物東を志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた  
いあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた  
すさは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた  
ま林のう洋の倍り

くははの乳母もあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた  
あは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた  
あは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた  
あは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた

あは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた  
あは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた  
あは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた  
あは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つたあまは志つた

春は初をさし季候と云子神をゆりうなきも  
 をもたすしておの影古く舞くもなれりて  
 句教のゆり

初めの句をゆりてむよ十日のうてうをひつる  
 せりやれ海道とあるしつとまれのうれきしつと  
 お方の冒中を流しぬけやとてうをひつるしつ  
 けりるゆゆゆりハ題をひつて呼ぶ百うと二百うと  
 さらばいせううはをちんぬんかみゆらやみの礫をひつ  
 けりしの中をあつてうすしつと勢や不勤をひつ  
 影古の端をけけむさうゆひくくあすはあのおう

活板も清くむしつとまきりつとつゆやうつう  
 けりる熟せぬとまうとてまうとてふ意のゆりも  
 けりる久八尺餘の字をなすしつと熟してぬけ字は  
 ちれりるゆゆれやゆよあをひつとさ方万神はあ  
 づりるゆせすの伎藝もまもるゝとつうつとゆゆを  
 けりるすあ子自然と急落の功をまもれ況や心の上  
 けりる子放あゆてすつとまもるゆあつとゆゆてゆ  
 きて志しつとあつとゆりつとゆは乃味を知らなく  
 一取捨の用をさうして用の上まもるまもるまもる

句の記法論

古語の扱  
きつゝは  
さびーさび門を入るゝ三日の月 亥杯  
暁の山唄とてほやゝまはれの全  
ほは月系流るゝ四百八十寺 希因  
そ徳よ入の門ありを轉——西秋のは——めよすゝ  
を舟と晋山唄や——あけちりり——まじ南朝使房を  
りさあまはる刻系秋月の季ををあけり子ハナ  
さく唱ふ終ハ語勢をひきまとおし——後く滑稽の  
入よりこ——そ信孚の唱なうとちきりく似語乃

古語の扱

きつゝは  
さびーさび門を入るゝ三日の月 亥杯  
暁の山唄とてほやゝまはれの全  
ほは月系流るゝ四百八十寺 希因  
そ徳よ入の門ありを轉——西秋のは——めよすゝ  
を舟と晋山唄や——あけちりり——まじ南朝使房を  
りさあまはる刻系秋月の季ををあけり子ハナ  
さく唱ふ終ハ語勢をひきまとおし——後く滑稽の  
入よりこ——そ信孚の唱なうとちきりく似語乃

きつゝは  
さびーさび門を入るゝ三日の月 亥杯  
暁の山唄とてほやゝまはれの全  
ほは月系流るゝ四百八十寺 希因  
そ徳よ入の門ありを轉——西秋のは——めよすゝ  
を舟と晋山唄や——あけちりり——まじ南朝使房を  
りさあまはる刻系秋月の季ををあけり子ハナ  
さく唱ふ終ハ語勢をひきまとおし——後く滑稽の  
入よりこ——そ信孚の唱なうとちきりく似語乃





まれば上子魂を入る一己の格調を因もたぬ時ハ人  
幸ひ人あつたれ亦吾俳諧の安堵も風も子足る  
草履は履を打唇子秋の風を吹すもきくは  
男女乃魔魁うて却る名眼のまわしけを安ん  
と柳田をやる林ハ燕居して一歩もけ柳の海法も  
なりれと午更乃通志を中子ゆり只間然  
うらまはち一々云一系いりかくおもふや

南北新話 上段

南北新話 上段

南川新話目録

源りの編 ある林新説 并伊丹の句解

松路の辨

言多き者扱 并ある林十あるの山和泉式部く墓の句解

記活 一句の意

按て化教の法 并ある林おやくの句

長き趣向を廻すの法 ある者編

之の法論 ある者編 軍乃の編

観お ある者編 前句の意 并ある林女房の附句 其考り詳

栢子 ある者編 地乃の句



古漢の扱 并喜林其凡の附句

折こむ句法 凡情

高季を低す句法

女と井古諸法引句 けき放す詞

おうより産お句 并物踏む佛の附句

古人の名を扱句法

おののみそ君福 并其偏を其乃引句

さおのこの福 他已それ句

模振を轉句法 才三

ある林おせ居の附句 并梅路お話

保りの節

涼袋 著

丘附合の依りをおもひのまや黄ゆも帯れそく人そ  
 舞雩一そ雨をそい牛あ月を足そ喘く時そん  
 空ま苗を抜いそ根お枯す人ハ翔川多蕉門の寂を笑ひ  
 かに油揚そおをを信ものハ稲の葉のひれちのそ  
 かのそ獅子泣笑乃世の中を志そハ新百韻そ  
 空突をおひつそ収支考ハ阿誰の活乃屈入入そ  
 嗚そそれ禮論子をわり涼免そ之足猿の拍子そ不そ  
 そおそあの山それおそまほをそ果ぬ中にそ此  
 乙由ひそハ翁の杯歎そも奇ひ次師一そ本一そ戲論

涼袋

著



あけくきよく一牛萬の俳人をあへてぬもも上葉  
とほくき化者ぬく八殿の神中子踊あそぶくしくも  
不易やあをおもひたのあそぶきまはりの山泉  
をほく一鞠一扱乃用をぬきは強くくそあはれる  
るきをきくく又一夕十荷の工葉をくく互もその底を  
けくす村に地泉もかひゆくくく一むか泉も皮くく  
強く地軸よりあそりむ子城ぬ夫の富貴もや抱く  
けあよそあををきく強くく此をうぬく桶をき  
さんあそぶあそぶのいかにあはれくく失びもあつて又あ  
はれくくいひよま命せぬもくく大澤も臨くく

あやーき化浩くのあそぶくく一寝も不易と云るくく  
志山もたけくあはれけむもあそぶ合のいま合も  
くをあそぶく一帯もあそぶあををきくく一人偏く  
けすも化浩をもや天地もけすあそぶすもくく全  
不易ゆくく去来化をもあそぶくくあそぶくく笑く  
くく又る降の吹くとさげぬも真向中のあそぶ  
あそぶくくあそぶあそぶ物化も鈍くあそぶくく  
笑はきくくあそぶくくあそぶくくあそぶくく  
あそぶくくあそぶくくあそぶくくの満もあそぶくく  
あそぶくくあそぶくくあそぶくくあそぶくくの  
あそぶくくあそぶくくあそぶくくあそぶくくの



附遠くありとぬいひてさし又古寺子裡の附り  
古くはえたるに押はし子足すす——誰う有氣  
又病子寄——いふをきあひしを繋す——とら

言系此報

春林を別者としておのく集り——夢の中子石に後  
くけり詠居れすうは前句よ

つづつと山と十西の山

や附くれものあり——居しけりをもさしうよくおしひぬみ  
物詠う傍よりけり——いれを計句点ぬのしくあはくむやまは  
さふ續つてもはえ系をたてむねりむさ由入申は

一ちの山や棒よふりまをれ人を他れ——又中あふうのちの  
附つてもつてもとまふ——と他者も駟馬の追うもまを  
悔わむやれく事をひく時ま林乃りきまう教ちうひ  
中し附續つてもやあう——

賀の希用南方子花り——以旅を練まけよものお話よ  
けいま林の高やありいひや何や——なや文合ぬもの——  
おのうよ

曹ら／＼おしりく草を承る

方ぐよいつみ式部ハ暮りあ。

あれ何う一婦一ははるや因きんていひしすの答はあ

解下

五

一むく詰つゝ向用いづゝいおいはりきゝ一字の扱あり  
 和泉式部及墓やまゝいんういあり一式部の墓と云  
 語路もあゝいずなうゝ意はわはくの種趣をい  
 客掌を拍ゆゝおろくはありきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 けりいゝお初心乃附きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 岸虎の傍よりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 志ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かさねゝま林のすゝと回すゝゝゝ式部の墓ありあゝ

やすいハ名まればすゝゝ伊勢と云まゝ日記るゝゝ  
 よひやゝゝかゝゝ一式部の墓と云子感懐をいめて  
 けゝゝゝゝゝゝの女なりゝ祭東也乃謡子ハありゝゝ  
 けちおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

死信

すゝゝゝゝゝゝゝゝの死信のまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝ死漢乃名をきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

南大

六



踏するありあはれいさ何き〜踏するありあはれま林  
論せぬあり〜

人乃田ノ指子との山と持るり

たれ死のり安子信賢の魂を入んま拍子との山と  
持あふれとす〜たれいさあ〜と〜を持せり

刺〜いさ〜對〜いさ〜

伯母子似〜鏡乃鏡〜おりふ〜

たれいびつ〜を持せり附〜いさ〜  
たふ〜いさ〜を他〜いさ〜  
昔のいさ〜いさ〜いさ〜いさ〜  
家と我教子別を惜

いさ〜いさ〜いさ〜いさ〜

一句のき

いさ〜いさ〜いさ〜いさ〜  
いさ〜いさ〜いさ〜いさ〜

あ降よ来〜川喜を〜いさ〜

臨村ノあはれいさ〜いさ〜  
あはれいさ〜いさ〜いさ〜いさ〜

いさ〜いさ〜いさ〜いさ〜

桑の下ノ毎日垣り透〜いさ〜

いさ〜いさ〜いさ〜いさ〜  
龍字するの祝法者〜いさ〜

藤下

桐や子孫よるる用帳

春に免ふひやくくくく色や

伏見妻井を乃古く西の自な  
は只金れ子身ていろく西の自な

隋ハ笛子菜山志つう風

春雨子おの名所一起キ

詩人ゆくハ藤梅をあらわおひお  
一とおは定ぬたうおひお

まかに油く快くうぬ

風子朝の節く若水く申く

夕アやまきまな人あま  
又吹く

了の流ハ風ハお

蠅追きれば志河ハ鎌なり

志河草津乃焼ハ保りハ岩園の粟粉  
乃さちうき

あさのお子溜くえきく月のお

兎を利ハハハハハハハ

玉ハ山子於夜多ありなけ  
い子況中髪頃髪友をや

持真名りく高妻の亭に定す

兄ハ山ハ水ハおき

あさの古用のまはきくハ  
兄翁ハありす

投すよ一おも可き腰陀袋

大字のヤ下履くる色

南七

此段一休の二乃字うき〜〜〜  
字うき〜〜〜

正に此辭も隨へあは〜〜

宵中子ひや〜〜

あは〜とさひ〜  
名乃あ〜とさひ〜

接ぐ他れ句法

長き趣向を云わゆ〜  
十七字のみ〜  
そよエ夫を付〜  
〜  
は損〜



儂夫此法の〜  
俳諧子か〜  
澹暁々詠〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

赤い踊りをも〜

此句より抑〜  
〜  
〜

服あ〜く〜あ〜あ〜

久〜せ〜山〜虎〜石〜付

長越向を廻す方

越向ハ二勾の百ヲ立〜く〜るやの物語を大あ〜と〜  
え論乃〜く〜廻さ〜ハ中〜く〜と〜は〜るや〜  
おこを〜お〜つ〜すよ〜勾〜作〜を〜あ〜と〜

一あ〜一画〜ハ〜終〜乃〜昔〜は〜久〜

お〜さ〜い〜あ〜〜一〜盗〜人〜判〜

何を付〜も〜附〜る〜あ〜う〜な〜お〜を〜何〜り〜は〜回〜轉〜  
清浄池の水音耳よ志み〜つ〜お〜あ〜る〜を〜今〜定〜す〜

う〜山〜乃〜お〜決〜あ〜け〜山〜の〜車〜等〜は〜ふ〜と〜あ〜り〜ま〜  
も〜い〜ま〜〜波〜の〜お〜こ〜や〜も〜ま〜〜い〜ぬ〜す〜み〜と〜ち〜ぬ〜ま〜よ〜は〜の〜  
お〜お〜の〜里〜ノ〜瘦病シロウキヤの〜い〜ま〜つ〜お〜あ〜ら〜〜ま〜さ〜る〜も〜あ〜り〜  
お〜あ〜ま〜〜も〜い〜ま〜〜つ〜あ〜あ〜や〜〜も〜孫〜子〜猪〜刀〜を〜擲〜つ〜  
目〜せ〜ま〜す〜〜も〜あ〜ら〜〜あ〜あ〜孫〜起〜説キの〜口〜ぬ〜も〜あ〜り〜  
化者キた〜ん〜か〜〜も〜あ〜ら〜〜あ〜あ〜

周を志〜ゆ〜や〜ら〜ら〜

か〜あ〜あ〜う〜ハ〜お〜う〜の〜も〜代〜ま〜る〜も〜何〜の〜坊〜れ〜小〜僧〜を〜  
お〜あ〜ら〜〜も〜い〜ま〜〜つ〜あ〜あ〜周〜を〜志〜す〜す〜や〜れ〜活〜勢〜  
よ〜い〜〜す〜ぞ〜の〜ひ〜ま〜も〜あ〜ら〜〜あ〜あ〜周〜向〜を〜

立あしはたけりこの木像を文合くおれ日限ひつ  
あり削のちたけけありくを尊像七くか好まや  
差中子御所を催促ちあかおくみき付て

はうさくめ佛所乃差又入あふ

先子論ちれちやぐ乃扱をえあし又

尾子おたく構乃し一燈

東部お海くこひまくまお入中あはのさく一尊あ  
木のくたれ子一お乃者をちよものあか入のあ  
るまをくみはにうくまあひのさく一尊あ  
ちりくくやる銀まきせくまあひのさく一尊あ

初れより伊勢越を伊勢のさく一尊あ  
さく一おおまあはくまあはのさく一尊あ  
をああまのさく一おまあはのさく一尊あ  
今一あまのさく一おまあはのさく一尊あ  
同格をくくく

あれなまはくまあはのさく一尊あ

かへつ子のおのりくまを賢ちくまあはのさく一尊あ  
えあはく

意の論

蕉門のちのさく一おまあはのさく一尊あ

かゝりしすはれいあはれはあのをさしうゝをみはけ  
の熱意もまゝして古法をわづらひ私の志をすまはれ  
も〜〜傾城も娘も夫も〜を遠くせり何  
とてあもてまゝいぢるさやち一葉をよもせり  
そよ遠のうかやあ〜〜花のいろも〜  
又あよゆのさしらすすまをさしひもあも〜  
もつなもあ〜遠のうも〜花も〜のさし〜  
とまもあ〜〜さし〜さし〜さし〜  
う雅〜〜さし〜上も〜下も〜花も〜  
娘〜あも〜さし〜の遠も〜さし〜  
人〜さし〜

花〜むちりてよも〜張ふ〜から〜猫の細〜  
油の〜香も〜さし〜花も〜  
う〜さし〜さし〜さし〜  
傾城も〜さし〜論〜さし〜  
た〜さし〜花も〜花も〜  
と〜さし〜花も〜  
あ〜さし〜花も〜  
と〜さし〜花も〜  
子あも〜さし〜  
から〜さし〜

片下

片下

輕重は勿作もあや一勾いふく一勾いあさくあぬ  
直の二もふたよれおよ譬論一ある直の詞を用た  
おのすくこ直を足せくねるや柁一巻の变化るハハ  
孝超々ま富の集乃直一おのやんありのまを恥  
ちくおく一扱ふて読みすればとく乃ともおの心  
やすく見つ了一れ替おも志くく又或人の説をま  
娘と一直も一はむまこも直もく女も一直も一  
男やふも直あらもやまよふ換推論のゆほあ  
少れ官所の設り一て凡後乃論ははれく一はま  
むすめをいひ自他と廉格のひまあはく一男乃

子ておれお綱はハた衆も繋うあくめいあり一は  
又けともあ論よも一系通女あう一むすこも男  
とやんやわの義理論よ及不町一同様の天はハ柳一揚  
く火箱乃木の扱なく志う一破の衆もあはく  
きんく一およくさるまう一

おうけくまやまう一て次はおおいやくやまをせ  
おれま一まおやなしくまや人のとあを化して  
腰かけて居くは海くおま一  
およけ一この直の扱入用もを足お一ハは  
くくお直もいひ又あすくは直もくくお又あ

昔は此のすゝを化財のしおろくえあきぬ  
 婿ありを妹乃くうあやうぬ  
 おくぬすすまの只を禁割  
 又あやれもまをよく又みこさ人うきさうぬ  
 女禮ゆきいそふたうききて  
 此におふーおこす  
 中すいぬあやか一甲まひういほな  
 を化財なり

又あやれすうきさうぬきうく見ゆぬ白子

おのゆやすん白可坊ハ換

惟えりるこまはひいなる

少紙扇子タノ本のひもく

火燧しよあうぬ男猫乃くかいて

姫妬のま乃廊えく来

姫妬のまはれうりけしおおろし

酒の免が十日は菊も供ふ

きつさうぬ又う来く居

あやのしれ字を結んぬいそのふれは日をか

いるはくハ長あなる名を

直すぬさるし祖師のお申



かゝるものにて越の山にたもつておのれは  
さうしてを借してあつての附よ

見替へておのれはさうして

たゞこれの事をかへ用ひておのれはた  
はたおのれはさうしておのれは

この論

仇討にたつたてはあつての櫻路のさへ首よ  
あつて人を仇討はたつておのれは  
さうしてあつておのれはさうして  
さうしてあつておのれはさうして

ついでにたつたてはあつての櫻路のさへ首よ  
あつて人を仇討はたつておのれは  
さうしてあつておのれはさうして  
さうしてあつておのれはさうして  
さうしてあつておのれはさうして

けふの世のまゝに御子まゝに御

おすれはひやうに御子まゝに御

弁あを機あへんせしむるに御

娘ひやうに御子まゝに御  
ついでにたつたてはあつての櫻路のさへ首よ

やうりの方幅をせふつくりあ

編みくろもの是くくひ

おのの吉水院をあれ

おのの所ら系よなつておのあつてつて附  
つてを轉不おもふくくひやえふ若野の白居の  
器もくくくおん道者よ靈寶をもえまると附  
されやかめさよハ村上陣義宮のいさ刀をもつていなう  
一なと律義一片の人よいひくく一ゆつてくくひ  
の名をも若事子信り吉水院の古びくくをもよ示彼乃  
まつりよすやえぬお新をもる

平生座

附のハ常子あれる子を伝りま一も亦す造他な

おまのす拍子よ来つ何もすい

あつてもまこを挑灯つ吸ふ

よあおのいさくおをきおお

もくつれく親を四人のいりて居

願りよ道をまふか

そりやハ眼のぬれ時あつて

あおきハいひのあつて

けつ先として脚あけせし等のつま。

南七下

晴くハ漏ふとおもふ春降りて

大勢ぬくく子くひ子をあ

けりつきのひくハ古く飄りく

雪く乃花もうと度いやく

りまゆおふ人を依法此常を志ぬ人をりふ

久きやより栗田いきかえり

八卦あハいさく居まら

此等の附ユ又ある一田あやの平生の扱て依法

やぬ人しうれハいさく地ば志まれば蕉門下き

け切もくやあはれくれとそも志くしや要すもの

けれもまふひく切うけいふは万ものもつ田をほく

あやうきもおもく海さも自在乃と他をおほく坂や

や地切おふなしく未熟の他者安り学ひハ田は

さききくはけあぬ

軍の寸論

むりま軍乃とあり中もハあけやりさるものハ才

他の扱あしく突き為くハ附くハ軍を讀やして

か

あめくや松のむさをり

氏者一騎又のあれ塚のむを

南七下

七

かくあるは、束の如く、おぼや、よて、自ら、く、  
一む、す、み、き、に、附、与、す。

曼、た、一、尺、を、以、二、十、ハ、日

ひ、お、え、さ、ハ、群、ま、い、く、さ、乃、大、す、く

は、我、諸、君、の、お、う、み、み、く、け、与、ま、あ、い、あ、や、ま、ち、  
ち、う、次、梅、路、う、法、笑、す。

か、し、す、の、ま、く、ま、ハ、あ、り、お、も

休、て、あ、い、お、う、あ、く、い、ひ、ま、何、い、  
ハ、

世、の、突、し、は、ま、あ、い、お、化、者、ハ、休、勢、の、お、あ、よ、あ、い、  
ト、冷、て、な、や、い、お、も、ひ、志、つ、く、さ、め、ハ、他、ハ、  
ハ、

ま、孫、の、お、か、り、ハ、灯、う、照、く、  
ハ、

米、抵、ハ、あ、つ、の、お、糧、入、れ、く、  
ハ、

下、の、お、又、字、れ、御、も、る、  
ハ、

お、や、ま、い、す、と、ハ、波、乃、悪、名

敗、軍、う、も、ち、を、つ、う、サ、て、喰、か、て、居

あ、れ、ハ、二、候、と、つ、け、ま、を、か、つ、る、一、書、の、お、好、ま、  
ハ、

を、一、只、虚、し、て、お、も、ろ、ま、お、あ、り、突、し、志、  
ハ、

あ、う、ま、の、お、り、号、を、用、い、  
ハ、

つ、不、  
ハ、

観、相

今の所よりおはせり降はれと  
にふくもをきくも  
又

判しぬええ乃店を足てまわり  
水仙さげし片もふりし後  
次の句ハ祝おの人神を化王せせぬあり

ほをあげもの早し女のあ  
けられもおの穢く空見し  
よまわりもおのうさうあうお場よの  
まつおし

あうのあ

附うすおと坂あうをあうの席上のはた今  
えくはあはれやも一上もあつまをのあ次の句を  
浦ふりあはれやもあうひされと化者あ  
あうの模様を人志れす足あひる一字のあも熱向  
もまはれは化者よりくふつさくひもせ神風彼よ  
うううう都ハ人のきと先き

とつふり物あ  
方夫に飯も喰はれ宗旨よて

やけき次子

畑のいづれを志きぬは蘭

と舟一打ハウーも色ね志ほ〜〜して傍より京近の  
与子遊す〜〜や又敷子夏季れ舟〜〜ハ〜〜あ〜〜  
ふもあ〜路第ハ〜〜ハ〜〜あ〜〜つ〜〜

魚〜ハ還俗子何〜京者〜

此我遊を扱々季をね〜志〜もあ〜れ〜ら〜る〜  
一〜し〜願を翁〜〜あり

一〜や〜柳舎子〜

ちれ柳鳥帽子ハ拂ふ萩の中

と〜ふ〜布固り

あ〜れ〜ハ〜志〜

〜付〜の〜前〜与〜れ〜他〜者〜帽〜子〜ハ〜拂〜ふ〜と〜志〜  
附ら〜ら〜ち〜ふ〜一〜と〜あ〜れ〜と〜を〜

益〜来〜て〜多〜暮〜川〜

い〜せ〜て〜支〜考〜を〜別〜者〜と〜ち〜れ〜舎〜子〜妻〜女〜の〜附〜

そ〜の〜ふ〜ら〜り〜を〜ち〜ふ〜

女〜席〜子〜が〜中〜び〜中〜を〜

一〜座〜此〜を〜中〜〜付〜〜は〜支〜考〜つ〜つ〜に〜長〜を〜掛  
〜伊〜勢〜は〜む〜し〜と〜ま〜は〜ら〜て〜さ〜ら〜め〜は〜あ〜  
〜中〜終〜ね〜一〜座〜け〜を〜

一きしんハ申直も一すすに直考長よ反び何て  
予をもすし一これや一と一く一も一に支考  
答ハは二一与直一長を一す一附ハあやれん  
やあしんハ申直中を一す一夫のりぬも  
一と一のふのしを一す一も一す一中一  
ろかしすすの事をも一も一服す一と一あや  
おのしすあしハ何れも一す一の者中一  
しん一も一が一す一やく一深一判者の服一

插子

插子ハあやよりすもよの附より求む

秋お務ヤ休入年田は直をも

如は得ぬや一鳴一ハ

あは附よりハ插子もあしやあやけりきたに  
るく

一なつま一し一け一明一

一の六上の一

地の句

およ地の句や云をちり一ち一  
一をを博るよ一  
化表やおほ一

口つゝ清夜や平治の境を去りて滑管乃ち  
おふりてありき。いさか下りて地のうけ中。

芥子の花は先かあるまなむ

中まいか申ひやまの陣くま。

奪七一がさ。むくも。

かくのこゝあふふ。一は子地のうけ尾おも。

ゆゝ。い角力なを。およ。たまたま。えん。けち。ちや。ま。

古語の扱

あふ。ハ。か。こ。ま。た。ま。ま。を。お。つ。あ。あ。せ。て。附。の。ま。お。

ゆみを入るれもつよし。一は。ゆ。ま。滑。管。乃。

あ。あ。を。ま。ま。の。杯。を。下。の。詩。を。み。す。や。よ。て。真。お。

口。ま。や。あ。く。ま。林。の。附。う。れ。オ。よ。

畑。あ。り。ま。ま。さ。く。門。と。あ。一。ら。れ。

隣。ま。く。白。ふ。鼻。々。の。春。一。風。

う。け。雍。陶。う。村。園。門。巻。も。お。似。處。々。暮。凡。相。鼓。老。と。な。く。

を。訪。さ。る。田。家。の。り。き。を。お。う。れ。摸。板。子。見。せ。り。あり。

さ。ハ。や。こ。識。者。の。他。誤。子。入。つ。て。友。傳。因。語。を。い。い。今。之。

執筆の難義と。い。や。お。う。

冷。あ。あ。も。新。雨。子。志。の。う。せ。れ。

宰。予。て。昼。を。採。ち。る。兄。弟。子。



又

おあろく 粥をほろしめさめかりん

同答するくる房ホー和思一辱

へつれもき才乃模枝と志ね一

おむむ法

ワさくも系ル墓なり道のさく

ホちくも旅子ありけいて来ル

歩けくの句子の解を入るるね一今てハホちくの  
在所を旅し一て他国てありけいてはるるね  
来ルやなり

志留の名も書ルとちるユ史一て

きまル初や旅し子もはる

たけくも人買子賣けくやあるのちやあきりす。子  
ワのれをたののれとる一

同枝

同枝ハル一とありき種ハ同系れとまかりかハあやあて  
連繋のしなるものあはれハウオの寂さをあらわす

解ウのちひくもや。同枝

一軒ホまきハカハ白のき

一句子も万の意味あるを見一

木の葉を落し小石を投ず

葉舟にありてゆくやうなまて

又

舟にありてゆくやうなまて

舟にありてゆくやうなまて

又

秋にやまをゆくやうなまて

舟にありてゆくやうなまて

又

道のまをゆくやうなまて

又てぬれにまをゆくやうなまて

舟にありてゆくやうなまて

舟にありてゆくやうなまて

舟にありてゆくやうなまて

舟にありてゆくやうなまて

舟にありてゆくやうなまて

舟にありてゆくやうなまて

舟にありてゆくやうなまて

舟にありてゆくやうなまて

あけよー飛よりの音信と又く六の辰の辰を  
きく人さへ

女の子がさ清とふあうの扱のあけよーまを  
乃くよういひさ

西の国よめくちくもすいぢやあつ

あやこ交うよしあごおは

しをさあす詔

何れよさしす詔をさるるよーあまのりさ  
らあまをさう他あり孫子席能治の直は  
あけよー入のおはへる。おはははは

くー田を刈てやふ類おとひありさかー梅路

夕佳よ六の敷もく人もー感動やう一とせ越

小松よあおひる一頃乃あうをゆつりよすなひ

佐者なまけいりも。あ言をやまんとは唐息を香  
るはぬさあよあ景ー入あうーさもあへるあは

いひせやう執筆あをあせる時舟乃やすみう  
くあ。又

又ちう(をさる)ま妓王の交う  
あふあうよさうさひもーてやねの用を偏  
や次。又ちうさひもー



おもむきすし

ちのれきのたへそみ畑に宿たへ

又 舟藤六の韓よめくは

又

天物にま中あしあへて

使者ひと通請蓋をり

おうみの論

おうみの道具のあつと言ふ乃あつはあつ

あつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

あつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

水うめあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

言下はあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

韓よめはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

突あつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

蟻を拂ふはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

真の角魚尾琴の附のうりはあつあつはあつあつはあつあつ

うりあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

すうはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

野鄙もあつあつはあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

ねやま村の化はあつあつはあつあつはあつあつはあつあつ

直心教人さゆも尼也ん論よいしおちやんとのあゆみ  
と句佐のまじりもさあしよるよお家よありみ乃  
一あ句もい

あゆみと島よさのぬす人

くくひれくかきさる観音

お乃病も医者よきつね教

捨せくもたかく婆くの痕瘡

喜の腹中ハ鮮乃用ん

よけ家ハ持々をりしと

おちりてくれと鑑着と人

も一詩笑の句佐もおおく一毛も論あハあ  
乃根向よあふこうちやせむおありれ後笑ハあ  
いやおのりありく自持のおりみよ動すやハお

さあ一々の論

他落よさひくすくぬさハ調膳よ香のおりすれ  
まもさうも一されとさあ一もさるちう困寂  
のりよれもおおし一又雨寂よあし  
只るのすまの寂と見れはさひ一ハ他落の神あり  
詩笑も慢無もいっけうさあ一もあはし  
おれう才よおすくく趣向をさる句よ

室乃自憐也ハ巾ぬいふつま

横川カノ般あめのもく秋乃凡

かく内々ハあやれ室乃自憐ハつゝるをものろさる

道江をきんあーハ系を足おろし定ハよりれや

之上山よりかまへともいへるまのいふれハ墨を

なうせぬはろの湖水乃あまろよ一動ハ志る森乃

ホあり川者のおくハきふあしくにす中とんる

ハあくお本の系ハ子あつらる

宥ろくもこハひ上 晴

二句ぬく希固ハ化して般ハとけけおす

好

化ハるあや

廿秋のト系をかすハあつま

釣子おいれハ着を穿ハつ

又

えくれぬえと子つハれ

黒本賣るハハ小葉垣ハ似る

いつれハ一葉の模様なる

模様を替すお法

附の替不ハ句化よりハ趣向の替不よりす定

一段のよつよをかへ

よのすいそめをくちまへ

傾城乃あづいれ中てまめま來り

是ち月廿六の同派よな山あり喜生との神志を  
きくれあり

才之

胆より三四の運ひとつふいあゝいおとれ摸格  
まかひあゝい一巻れまよもはれいおのすくこれ極  
まゝいお一様子古人もけ少はをつくせハ今き  
すあつよあゝ孫や

あゝい火を一ふつよかきまこ

とやふさうよいもの一羽蹴る

枯わうとおもふね子帆をぬて

冷くと股川をけい取らさめ

あゝいにもまゝい何よりかよりよめ

抱して才之いおとれすくよ繁す一とありおれい

布子おしひも言葉よてあゝいひるも只おれい

眼の文やまゝい

まゝねおせ居の附

獲新百額の序子もせ



くいのもすいよかすのむらうて

昼はありいよえ中ねおせお

いよやよの巻は諸家おのく漫真一ておを振ひ  
 重きを違はず存林ひやう晏然とて今宵は  
 夕なまよものう似るうとあきくそおひはし  
 うはおき居乃附台よおのく満座口をけくむか  
 たりーやその扱梅路ようううおのうはめ  
 粟ーるの置は代ーるやーぬおせおとさうは  
 おしーるさー作おううの曲を曲はよおはれ時  
 一候志のめて塔をさるは候一度のあうりありは

曲長の句をゆとれはまふ工又あれやとありは  
 まるは練務より梅路の閑より野をかこみ  
 夢はね乃るもつすれやうは雅神何うをや  
 梅路をくーお一れや作附台乃目ををゆき  
 間終志のうすたやーなりーおううかくおさふよ

東塾 孝超校書

南地新話 大尾

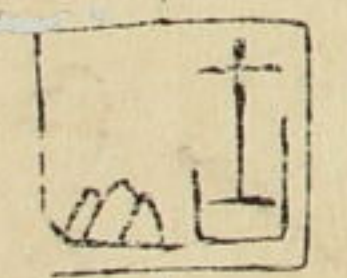
跋

其の林や人の所を往くは涼しくやうは  
 松や竹や草や花や鳥や虫やと我幻く菴子や臺  
 をやうくま言な誦一今を一先すおやう  
 示しやけなうく彼を明くす付あしんき  
 黙然やう一多おやう一たうあやうく此後南水子  
 多一南方の人連句りかろく北の方の人多  
 子もやまあはれうきくやう茶法なを教をふ  
 一やう雲雨の新語一跋す教も南水子二  
 行ふはあをう一又少法よのかうも様乃

上りあうくやうくやうく一東武やう旅を  
 愈一久きは少字新書をく次て眼を  
 せん清子回のほくはう

延享五戊辰季夏

和州吉原胡樓主人





書林

東武日本橋南一丁目梅村宗五郎

京都寺町三條上

井筒屋庄兵衛

南  
北

冊  
二

